祭礼実践による地域アイデンティティの再構築

――愛媛県新居浜市「新居浜太鼓祭り」の事例――

総合研究大学院大学　倉田健太

１　目的

本報告の目的は、祭礼の観光化への対応や地域間での統一行動を目指す祭礼運営組織が、新たに創りだした会場における実践を通して、担い手の地域アイデンティティがどのように変化したのかを明らかにすることにある。研究対象には、愛媛県新居浜市で行われる新居浜太鼓祭りをとりあげる。

同祭礼では、太鼓（太鼓台）と呼ばれる、豪華絢爛な装飾に彩られた屋台が使用される。台上での指揮者による指示と太鼓係の打つ太鼓の音にあわせて、約 150 名のかき夫（担ぎ手）が太鼓台を運行する。これらの太鼓台が集う各会場での演技が、祭礼の見所として注目されるのだが、その一方で喧嘩祭りと称されるように、人同士のいさかいだけではなく、鉢合わせという互いの太鼓台をぶつけ合う行為にもしばしば発展する。鉢合わせとは元々、漁場争いや水争いによる地域間の対立が引き起こす喧嘩行為で、死亡事故にもつながる危険性をはらむ。それを防ぐために運営組織が発足し、祭礼の整備が進められていくが、その過程で担い手が地域に対してもつ意識が変容し、組織自体も再編される。

２　方法

本報告では、この経緯をたどることで、担い手の地域アイデンティティの再構築の過程を考察する。具体的な方法としては、運営組織の発足、主要会場の整備と統一演技の成功、組織の再編と方針転換という３つの場面をとりあげて、当該期の状況を新聞記事や運営組織会則、また聞きとり調査から分析する。

３　結果

分析の結果、運営組織が再編された時期には、喧嘩行為をいかに抑えるかという点をめぐって組織構成の面で、とくに会長職の選出についての方針転換が確かめられた。組織の発足時から再編前までは、各地域で推薦された人物が会長に就任する輪番制をとっていたが、再編後は輪番ではなく、祭礼現場に携わって各太鼓台を統率してきた人物が継続的に就任するようになる。方針転換の背景には、主要会場に各地域の太鼓台が集まって、統一演技を成功させたことがあげられる。この成功により、地域間での連帯を図る取り組みから、地域を超えた広域的な統一行動の継続に向けた取り組みへと、担い手の意識が切り替わった状況がうかがえる。

４　結論

以上から、まず統一行動が成功したことによって、担い手が地域に対してもつアイデンティティが、広域へと拡張された点を看取できる。そして運営組織の再編、とくに会長選出について、輪番制からいわば実績主義への方針転換が打ちだされた点には、実際に意識が切り替わった影響を、つまり担い手の地域アイデンティティの再構築を確認できる。